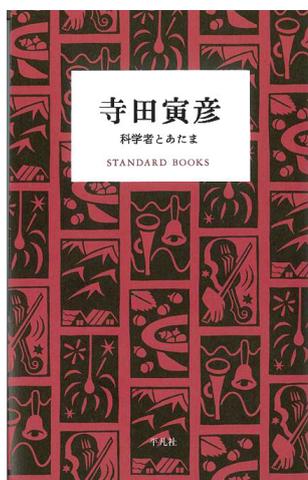


■私の役に立った本

遠田 淳のおすすめ

(株)三菱化学科学技術研究センター有機デバイス研究所



分野：自然科学全般
書籍名：科学者とあたま
著者名：寺田寅彦
出版社：平凡社
出版年：2015年
価格：1,400円

高分子の科学に触れるようになったのは会社に入ってからで、それまでは有機合成の世界に居りました。初めから高分子を目指したのではないので僥倖ながら広く「科学」についての書籍を紹介しようと思います。

古い方にはおなじみの寺田寅彦先生の随筆集を紹介します。先生は明治から大正にかけての物理学の教授であると同時に多くの随筆を残されています。その頃はインターネットもパソコンも、ましてや海外旅行もコンビニも身近なものではなかった時代で、物のすべての流れが今よりはるかに遅かった時代です。しかし、その時代と今の時代に共通すること、共感できることがあれば、それは普遍的な真実であると言えます。先生の55歳のときの随筆「科学者とあたま」に、「ただ大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟があって、初めて科学者になれるのである。(省略) 観察

と分析と推理の正確周到を必要とするのは云うまでもない」とあり、手段や方法は違って今に通ずる指摘であると共感する次第であります。そう共感する小

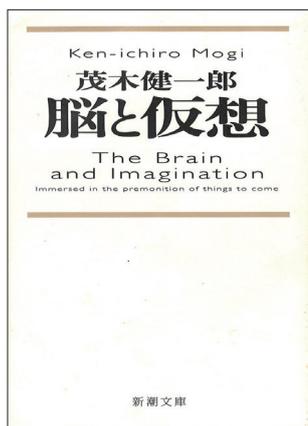
拙は、「羨むべく頭の悪い立派な科学者」のはしくれであります。また、「何事も考えない人は、おそらく科学の世界に縁のない科学教育者か科学商人の類であろうと思われる。」とも指摘されています。さてどう感じられたでしょうか。このほかに「宇宙線」では自由意志、「手首の問題」では教育論、「津波と人間」では安全意識を論じています。かかる随筆集をたまにべらべらと眺めてみるのはいかがでしょうか。



■私の役に立った本

小柳津研一のおすすめ

早稲田大学理工学術院 教授



分野：一般
書籍名：脳と仮想
著者名：茂木健一郎
出版社：新潮文庫
出版年：2007年
価格：438円(税別)

研究の役に立った本かと言われるれば、脳科学や心理学を学んでいるわけでもない私にとって正直？です。しかし本書を読むと、物理化学を学び始めたころに取り憑かれた強烈な違和感を思い出して、それをずっと忘れようとしてきたことに気付かされます。音の高低は空気の振動数の違いであり、緑色の光は波長530 nm付近の電磁波であると言われても、感覚としての音や色そのものがなぜ数値とイコールなのか、100 nm程度の波長差がなぜ緑や赤といった決定的な色の違いになるのか、全然ピンとこなかった人は結構多いのではないかと思います。

私達の感覚とは、相互作用する1千億(つまり6兆分の1 mol) 個の脳細胞の「活動形態」に過ぎないとか、そもそも数値化できない感覚や心といった主観的現象を科学の対象にすべきでないといった考え方もあります。しかし、本書の中で、小林秀雄の講演録を引用しながら、心も自然の一部であ

り自然は単純であるべきだからこそ、心が脳の活動に平行した現象(随伴現象)であるはずがないと論じられていることについては、まさにそのとおりと頷かされます。

私達の感じる世界とそれを記述しようとする方法論に実は大きなギャップが存在するとすれば、客観的なデータの背後にある(かもしれない)何かをいつも見落としているのではと心配になって、考えさせられます。私達の研究活動には、何の役に立たないことかもしれませんが……。

